了見が狭からう。可から、最う彼方へ行きねえ、恐れて酌をさせな
いんぢやねえ、其手ぢや酒がまづいからよ。」
タタと手酌の呀えた音。

（四十一）

餘程待たねばならぬ人があつたと見えて、貴夫人は、軈て復仇の
其の勢ひ！其の式を見せるのに窓から飛んで出る事もせずに、形相
は夜叉のやうに成つたけれども、默つてぷり〳〵して舊の座へ返つ
て行く……とガタリと椅子を摺らす音が聞こえた。
見向きもしないで、順一は又一杯引掛けて、ト目錄が二枚卓子に
あるのを視めて、苦笑ひをした。
小篠の姿が、上り口へ、燈に遠く描き出されたやうになつて入つ
て來た。

「濟みません、遲くなつて、」
「何うしたい？」
「一寸年坊が、」
と言ふ。一番末の妹で、今年七歳になる。小篠が十九の時、母親
が產をした。やがて人形でもない、娘心に、嬰兒は借りても抱いて
見たい年紀、內が料理屋の時分なれば、客の座敷へも構はず持つて
出て、道理で腹が大かつた、いや母樣、となぶられるのを嬉しがつ
て、人前も構はず乳を押着けたものだつたと。……最う此の兒に
は小篠は目もない。
「何處にしませう。」
「其處が可からう、」と其の立つた對向ひの處を目で敎へる。
「丼んで掛けませうか、誰も居ない。」
とするりと寄る。

順一は羽織から指を出して、默つて背後を一寸指した。
「ま、」と呼吸を呑んで、楪つたいと云つた身の動作で、卓子の角を、間に入て、きちんとお大鼓で椅子に掛けて、裾で淺く白足袋を揃へると、祝文を讀む形で、目錄を、ト視めたもので。
「まだ何にも食らなくつて？」
「飲んだばかり。」
「可厭だ、可い色よ。……あゝ、お腹が空いた、貴下は何？」
「安いものが可いね。」
「困つ了ふ！平民の子は。」
と澄ました風采をして、横から顔を出したボーイに振向き、
「此處に日本の字で、鰈と書いてある處は、フライか何かでしやう。それに、鷄と云ふ處を二品ばかり、後でカレーの御飯、それからスープ、」

と誂へる。
「勘定は私がする。」
「へへへ、」とボーイが笑つた。
「貴婦人の前で何ですか。」と冴々とした聲を懸けて、一寸背後の卓子を覗いた。又實際、覗かねば見えないくらゐ、卓上の綠の蔭に、以前の夫人は身を潛めて雉子の伏隱れた風情であつた。が、やがて其のほろゝ鳴く時、其處が噴火口で、地震が震るとは二人とも知らずに居たらう。
「年坊が何うかしたのかい。」
「否、何うもしたのぢやないんですがね、前刻お湯へ行つて、歸りがけに一寸家へ寄つたんですよ。……然うすると、あの兒が何か駄々を捏ねて、母樣がお灸を据ゑるんだッて騷いで居ましたから、連れて歸つて遊ばして置いたんです。……人が髮を撫でつけたり

なんかしやうと思つても、乳をおくれなんて、」

と胸を壓へて、

「膝へ乘懸つて居て離れないですもの。」

「何だ、燈の點く時分から湯へ行くのか、心細い、そんなに暇かい。」

「まさか、いくら内にばかり居たつて、日が暮てからお湯へ行きはしませんよ。前刻ですよ、貴下が、あの電話を掛けて下すつたでしやう。年坊はね、最うあの時來て居たのよ。ですからね、姉さんは出掛けるし、最う日が暮れたから、お内へお歸ッて然う云つても、最う少し遊んで行きませう、行きませうよッて肯かないの。

それにね、段々不可なくなつてさ、此の頃ぢやね、お寶を使ふことを覺えて困るわ。……不可いよ、年ちやん、小兒がお寶を持つとね、お巡査さんに叱られるからッて云ふとね、嘘ですよ、お隣の

美いちやんは銀貨のを持つてるけれどね、それだつてね、お巡査さんに叱られはしませんよ、なんて高慢な口を利くの。」……と嬉しさうに莞爾する。

(四十二)

「それでも可愛いぢやありませんか。あゝ、否、買食はさせませんか、何を買つてもね、屹と袋ごと内へ持つて歸るんです。護謨のボンボン一つでも、私のだつて取つて置いて、姉ちやんわげませうッて、私が行けば直にくれます。そりや可いけれど氷を飲んで困るのよ。早過ぎるわね、お花見頃から拵へるぢやありませんか。……其も……甘露なんぞ、ちゆう〳〵吸つてるんでは納まらなくつて、金時小豆だなんて贅を云ふのでせう。

まだ小母さん許ぢや金時は出來ない、ッて、私達が然う云つて聞

かせるとね、……づん〳〵自分で出掛て行くのよ。お聞なさいよ。而してね、出來たてがございますつて。困つ丁うの！

最うね、日比谷あたり迄遊びに行くんです。電車が危いから遠くへ行くんぢやないよ、年坊ッて、此間も叱言を云つたんですがね、車で母衣を掛て行きますよ、姉ちやん、と澄まして云ふでせう。——何うするのかと思つたら、お守さんと一所なんです。……』

「然う、お守さんが居るのかい。」

と順一は勢ひの可い聲で云つた。小篠の家は、父親がどつと床に着いて居るとは云ふが、まだ子守も置けるらしい、と嬉しく思ふと……

「嘘よ、そんな御身分なものですか。餘所のですわ、お向ふのお守さんが乳母車を曳くんですッさ。其處の嬰兒さんと合乘なの、澄ずして乘つて、可い氣なもんぢやありませんか。嘸生意氣な、馬車

に乘つたやうな顏をして居るだらうと思つて、私可笑くつて、」と得も云はれぬ優しい顏して打微笑む。

「で、今竹家へ置いて來たかね。」

「最う徐々、お睡なんです。……日が暮ると意氣地はありません。丁ど内から弟が迎へに來ましたからね、翌日玩弄物を買てつて上るからッて、漸と歸したんです、つひね……其だもんだから遲くなつて、」

「何、遲い事はありはしない。私も途中で思懸けない、知つたものに出逢して、此處へは今來たばかりだが、可愛想な事をしたね、連ておいでだと可かつたつけ。」

「人見知をして不可いの。」

「泣くかい。」

「私が一所だと泣きはしません。外へ出ると蜆貝で、其でも人樣

の前ぢや柔順しくつて、默つて坐つて居ますから、貴下、面白くないでせう。」

「飛んだり刎ねたり、玩弄ではあるまいし、」

「あゝ、玩弄物と云へば、歸途にね、銀座通で玩弄物を買ひませう、一所に來て下さいな。」

「可厭さ、通は明いから、」

「でも、二人で買つて遣りたい。……一寸電燈を消しませうか。」

「馬鹿な、於登利ではない。」

雨がばら〳〵と廂にかゝつて、煉瓦に颯と音を立てた。……

どや〳〵と跫音激しく、搖上つたやうに入つて來た二入連の客がある。……一人は、上下大島紬の、大柄な紳士で、一人は大たぶさに結つた立派な相撲、二段目あたりの關取であつた。

入りしなに、紳士は、小篠をじろりと見た、ト小篠は一寸俯向いた。眉がくつきりと蔭になつたが、何の氣なしに、順一は物珍らしげに關取を視めたと云ふ。

「とう〳〵降つて來た。」

と云つて、紳士が眞中の卓子へ行きつゝ、外套を脱ぎかけるのを、相撲がヤッシと云ふ身で受取る。又相撲が抱いても然るべき重さうな外套で。

「丁度、なあ可い鹽梅でござりましたえ。」

「や、買物があつて遲うなつた。」

と件の貴夫人に云つて、どつかり腰を掛ける。其の聲を聞いて、見ぬやうにしてチラと見返つた時、帽を脱いだ、額の野卑な、色の黑い、鼻の低い髯の見事な其の紳士の顏を見ると、眉が迫つて、順一は著しく顰んだのである。

忘れて成らうか。年紀こそ違ふが、同郷の中學時代に見知越の—

―當時有名な成金で、然も近頃渠がために順一が恥辱を蒙つた、五坂熊次郎と云ふ、何とか會社の重役なりしよ！

無念

（四十三）

誰も同じ事、……順一は小篠のために、遊びの金子に詰つたので、此方から急つて客を求めるやうになつた。敢て以て客と云ふ。順一は美術家でも畫工でも、賣らむ哉なら、買人は客と云はねばならぬ。

ト此の五坂熊次郎を紹介するものがあつた。……報酬は希望に任せる、が、畫に註文があるから、一度話をしたい、と云ふので、名は豫て……其の人となりも略知つて居る、中學時代から存細あ

つて、聊か面白からぬ男だとは思つたが、情ない事には、小さく成つて其大なる門を潛つた。

面會する日を、約束してあつたにも係はらず、順一が名札を差出した時、一臺二頭立の馬車が玄關に横着けに成つて居たが、來客ではなく五坂が何處へか出掛ける處。

で、暫時玄關前に、其のまゝ待たせて置いて、五坂は外出の洋服の、手袋を嵌めながら、人間は何處に居ると云ふ風で顯れた。背後から送出す、二人の書生と三人の女中をべた〳〵と坐らせて、會釋もなく馬車にづいと、上から指の太い手を順一に向けて、

『生憎ぢやが一寸出掛けるで、談話は途中でしよう。さ、これへ。』

順一は攀上るが如くに乘つた、……止せば可いのに、と後で聞いて私は思ふが、親に人參の代でもないのに、野郎が身賣をしかねない了簡方で仕方がない。

青雲白日、馬車を揚々と驅らせながら、五坂がした繪の注文と云ふのは、……自分等同趣味のものが月に二回づゝ早稻田の其邸に會して、何某和尙の提唱を聽聞する。次回には碧巖の輪講と云ふのを遣る、で、其の一席の光景を、庭、座敷とゝもに描寫して貰ひたいと云ふのであつた。

話は四五町の間で濟んだが、馬車はなか〳〵留まらぬ。牛込、赤坂、麻布と出て、廣尾を廻つて、二本榎から五十疋子くんだり、薩摩原を眞直に……芝の公園で森の中へ放り出された。

『紅葉館へ寄るで失禮するで。』

芝增上寺の屋根を見て、網がとぼんと立つた時、惡鬼は虛空に雲を捲いて行方知れずなりにけり。……同じ頃、小篠は新橋で鬱いで居たらう。……

坂田金時是にあり！順一が打明けて恁うと言つたら、姉もたとひ

身を賣つても、其の思ひはさせまいものを、——あゝ言效ひのない。昔々の片腕より、當分片手に成る仕事と、順一は阿容々々又五坂の門を潛つて、輪講の席を、次の間に控へさせられて寫して歸つた。

人數は九人居た。客は皆紋着袴で、いづれ目下に違ひない。中に切髮の被布を着た婆さんと、圓髷で、小紋の紋着の年增が交つた。床の間を、城の如く背負つて、五坂熊次郎、號を青巖齋入道。忘れもせぬ、……大島の着物に焦茶の、些と瓦色ぐらゐに赤い、無地の紬の羽織で、押直つて、鐵如意の取手へ、ト願を支くと、さしむかひ正面の處に、色の白い、髯の赤い、眉の薄い、痩せた坊主が、黑染の法衣で控へて、手にした拂子で時々頸首を一寸々々搔く。

庭の梅の北面に風渡つて、誰も、烈々と炭の起る火桶を傍へ、碧巖を座に開いた、大廣間を明放しの、築地の下に造りものゝ鶴が三羽。……親子で居たのさ。

姉の前も恥ぢよかし……此の趣を十日ばかりで、絹地へ極彩色に認めて、歸途は腕車で飛ばせる氣。歩行いて早稲田へ持つて行くと、直に主人の居間に通して、火鉢と一所に金五十圓也とした紙包みを押出した。

『どれ見やう。』

とサラリと展き、鐵如意で端を押へ、髯を空ざまに撫上げながら、眼をきろりと熟と視て、

『喝！』と吼えると、傳にこれを獅子吼と號ける、五坂熊次郎入道青巖、畫中の壁をどんと撲つて、

『凡人ばかりぢや。詰らん！これは、一人として、禪を心得た顏がない。全然こりや木偶之坊ぢや……君は禪を行らんと見える、話せんな。』

と眞中をぐい、と掴んで、片端からびりゝと裂いた。

『其では描き直しませうでございますか。』

顏色は變つたが、順一は靜に言つた。

『畎目ぢやねえ、君は禪を解せんのだから、此の畫は描けん。畫料だけ損するで言分はあるまい。』

と最う一裂。

裂く……と見ると、金、其の五十圓の紙包を取る手も疾く、畑草を拂くやうに火鉢へばつ！木の葉に銅の香を添て、ひら〳〵と燃え上る、くるりと鋸に捲くのか疊へ。さつと焦げて飛ぶのか椽へ。

『あつ、』と云ふと……さすがの入道、我を忘れて悶く手つきで、空を掴み、兵子帶の丸腰で、足首をぬいと這身。

順一は片膝立てゝ居た。喫みさしの卷莨を棄てゝ、屹と見て、入道が今這ふ際に、裂かれた繪絹を一掴みに眞中を挫いで取つて、

『骨は拾つて歸るよ。』

と言ふや否や、斜つかひに衝と出た。……其切逢はぬ。

（四十四）

其の五坂熊次郎青巖が、此處へ相撲取を供に連れて來たのである。さて不思議な事には、前後三度、早稲田の渠の邸へ出入つて、つひ其の横顔も片袖も見なかつた、五坂の細君は、前刻から其處に連を待つた貴夫人である事が、疑ひもなく三人の擧動で分つた。

ちらと一目見たなりで、順一は素知らぬ顔をして、小篠とスープの匙を取る。

背後で、潛んで、沈んで、ひそ〳〵と貴夫人の喘く聲、切れ〴〵に、且すゝり泣くのが交つて聞こえた。

戸外に降る雨、徐所に吹く風のやうには、順一の耳へ響かなかつた。其方の泣じやくりを聞いて、婦、何を言ふか、とひとりで冷か

に笑つたゞけでも、既に其の平かならぬ色は面へ出たのである。況して、其の夫の紳士は、我に對して如何なるものぞ！麹麭を切る時、右手にキリ〳〵と筋が入ると、力が餘つて、小刀が左の手の拇指の腹へ辷つた。

俯向き勝に、何故か俯目で居た小篠は、去かし注意深い細い睫毛を衝と上げて、

「何うかなすつて？」

順一はカツキと指を嚙んだ。

「何！」と言ふ。

「おい〳〵。」

と五坂が落着いた聲を懸けた。誰を呼ぶか分らぬに、順一は最う振向いた。唯見ると五坂は踏張つて、脚を開いて居たのである。

顔を合すと、反見に成つて、づんぐりと腕を組んで、

「おい、其方の卓子の、……」
「何ですか。」と羽織の袖を引絞つて椅子を握つた。
「君ぢやない、其方に居る其の婦だ。」
小篠は嵐が來たやうに、ぶる〳〵と細い肩を震はしたが、すつと立つて椅子を離れた。
「私……まあ！」
と身の支へに、卓子の端へ支いた手を、丁と取ると、冷い汗して、あはれに順一に縋ると、取合つたまゝ、
「五坂君か、多日、こりや私の家内です。」
と順一が言つて、
「お篠、御挨拶を。」
「はじめまして、何ぞ御用？」と手の指に力を籠めた。
「工面が出來たか、異う酒落るわ、フ、ン、」と一つ嘲笑つて、

「無禮な奴に挨拶はせん。」と、赫と吼える。
「何が無禮だ。」
「不見轉を紹介して、妻ぢやと言ふは、紳士を侮辱したもんぢやらう、何うだ、そんな奴に口は利かん。」
「利くな、默つて居れ、其の方が勝手だよ。」
「うむ、勝手ぢやらう、勝手ぢやらう、が然う勝手にはさせて置かん。相當の處置をして遣る。社會の制裁を加へて遣る。關取、おい、引抓んで二階から放り出せ。可から、遣れ、私が萬事心得とる。さあ、抓出せ、えゝ、遣つけえ！」
と卓子をはたと打つた。

(四十五)

ボーイが留める暇もなかつた。

「失せ居れ！」

と言ふと、最う其の以前に、硝子盃の大を十ウばかり幷べて居た胸の赤い關取が、順一の胸倉を無手と取つた。

「何をする。」と聲もよく出ず、咽喉の締る苦惱に苦くなつて、背後へ反る手、思はず當つた小刀を取つて、逆手突きに切拂ふ。

「あれ、」

と小篠の遮る間もない。

「野郎。」と騷がず、ハタと脈處を拳で打てば、弱つた順一が、一堪りもなく小刀を落して、ぐつたりとする、手首を壓へ、

「えいっ、」

で一押しにぐいと押されて、

「無念。」と叫んだ時であつた。

椅子の凭を片手に壓へて、

「關取、」と身を斜に、片手を胸に當てながら、小篠が若々しい聲して呼んだ。

「一寸、關取、おい。」

「汝あ？」と大髻をゆたりと見返る。

「辰巳屋の篠を忘れたかい。篠だよ、お篠だよ。」

と云ふ聲は、稍息切れして、胸をしやくるやうに聞こえたが、順一を搔掴んだ相撲取の手は、自から、振放すが如くにはづれたのである。

渠は若い額の廣いのに、皺を刻んで、へんてつにニヤリとした。

「えっ、嬢様で、へい、すつぱり見違へたえなあ。」

五坂と其の夫人は、是を見ると、言合はせたやうに腰を掛けた。

而して顏を見合はせた。

ト揉手で居る關取に目もくれず、

「あれ、血が、」
と順一の手を見て、驚いた胸が震へた。瞻りながら、ずつと帶の間から懐紙を引出すと、うつかり取る手に、中挾みの懐中かゞみがばたりと落ちる。
ボーイの一人が、五坂をじろりと見て、一寸拾ふ。
其も忘れて、懐紙を其のまゝ、小刀で切つた指を包んで、
「痛むの？」
「否！」
「お巫山戯でないよ、闕取。」と疵に片頬をつけたさうに、熟と順一の手に打傾きつゝ、角觝取を流眄に懸けた。
「串戯事でがんすでえ、嬢様、其の後は、御機嫌好えか。」
「機嫌は悪いわ。」
「えつへゝ、えつへゝ。」と腦に手を置く。

「貴下、最う歸りませう、ね、さ、歸るのよ。」
と年坊をすかす時、恁うよと思ふもの言ひで、
「旦那様がお立ちだよ、送つておいで、闕取。」
「ねえ。」
「可厭かい。」
「ねえ、えゝ、參りますすで。」
「さあ、おいで。」
と順一を前へ、小篠が續いて、楷子段を下りかゝる。……
「可いのか、おい！」と誰に言ふか、大音に五坂が呼んだ。
「然やうなら。」
と顔を上げて、姿が下へ、小篠がづゝと下りた時、二階でどたどたと音がした、追ふのをボーイが宥めるらしい。
後は二人が雨の中を、夢中で電車まで驅出した。

が、此の一場の小劇のために、やがて恐るべき代價を拂はねばならなくなつたのである。小篠は可哀、五坂の手に殺されて、其の露の身を落しだ、と言つても好い。

順一が死敵の如くに感じた五坂は、豫て小篠に執着して、追ひつ廻しつ附纏つて居た男である。然も、藝者にならない以前、築地の砂子に女中した時分から、金子の鎖に搦み、義理の搾木に掛け、八方十六の手を借りて、或は威し、或は賺し、或は慰め、或は責め……眞面目な時拜みもすれば、酒を呑んでは、殺す、と短銃を出して迫つた事もある。殆ど狂亂して今に口說く……

蟲籠

(四十六)

小篠は些とも話さなかつた、順一は何にも知らなかつたのである。其の五坂に、思ひ切つて、明白に然うした處を見せた小篠は、胸の中には既に多少の覺悟をして居たに違ひない。……けれども前後の樣子に察して、五坂を知己か、と順一が其の夜、於登利の二階で聞いた時は、

「二三度よばれました。」とばかり何氣なく言つた。

「玄かし、何だ、彼奴にばかりは、私は生命に懸けても……不承知だよ。」

「誰が、そんな氣なら藝者になんかならないんですよ。」

と言ふ顏に蔭がさして、

「貴下、貴下は奥さんに、今のやうなことを言ひますか。浮氣をするなの、旦那取をするなのと、然う言ふの？」

「馬鹿な事を。」

と笑ひ棄てた。が、餘りの事に、呆れ顔で瞻ると、小篠は目を外らして、

「あゝ、情ない。……貴下はそれぢや、もしかすると、私が客に出るぐらゐに思つて居るのね。そんな氣でおいでなすつて、何故私に、默つて伊達先生の風説をさせて許して置くの。――罰が當るぢやありませんか。」

「そりや少し話が違う。何も、何が何うしたからつて、風説をして不可いつて事はない。」

「ぢや、旦那取をしろつて言ふの。」

「又、詰らん事を――左かし、好な男なら勝手にしたつて可からうと思ふんだ。お浮氣は御意のまゝ、」

と活路を開いて、少し落着き、

「可厭な客を勤めてこそ、賣るの何の、と言ふけれど、氣に入つ

た男なら、そりや色戀さ、色戀は自由だよ。誰が故障を言ふものか。辰巳屋のお篠さんが浮氣をしたつて、先生に、別に失禮な事はなからう、何も勝手だね。」

「勝手にしますとも。」

小篠は、怪我した順一の指の、結日を弄びながら、肩で胸を押向けて、

「好な人がありさへすれば最う遠慮なんかして居ないわ。……生命がけて恁うと云ふんなら、吵でも不便だつて、先生が然うお言ひなすつたつて。娘で居て唯上氣せて、恥かしいのが先に立つて、控へてばかり居だもんだから、和歌吉さんに好い事をされて了つてさ！口惜しいつたらありはしない。あの、まあ、打着けに先生を口説いた圖々しさが、それでも羨ましかつたものなのよ。貴下、先生を連れて來て下さい。最う今度なら遠慮はしない。……眞個に勿

體ないほど好いたらしい方だつたわね、それで何かゞお出來なさるんだもの。……何處の宴會へ行つて見ても、まつたくさ、伊達さんに較べると、口說く人は誰の容子もえてに見える。

私は端藝者でも、えて芝居の女形ぢやないわ、お客が取れるもんですか、考へて御覽なさいな。恁う顏を袖で隱しても、先生のお姿が今でも目前にちらつきますもの、然うすりや何處か私の身體に、先生の影がついてるんでせう。……其の身體で、罰が當るぢやありませんか。

「最う一言もない、冷汗だ。」

「否、處が貴下の身體にも何處か先生の影があるの……ですからさ。」

「あゝ、最う止しておくれ。」

順一は、四邊を眴して、聲を密めて、

「ひや〳〵する、……」

「可い事よ。私が惡いんだから、謝罪つてあげませう、何うせ前へ死ぬんだから。でも、もう私も先生とはまるであかの他人ぢやないわね。何時かお宅へ伺つた時、奥さんが、貴下のかはりに、私の持つて行つた重詰ものを、先生の寫眞にお備へなすつたわね。——口惜しかつたわ、私。」

と膝に手を懸けて、

「貴下と二人で見せつけるのを、日蔭ものゝ私なんぞが、其を妬きはしないけれど、あゝなすつた御容子の、先生と親類附合ひなのが、私は口惜しい、羨しい。……あゝ、早く死んで、冥土へ行つて、先生のお臺所を働いて、惡口が言はれたい。」

と手を辷らして膝に突伏す。其の背を抱かうとしたが、尊いものに觸れるやうで、ハッと手を控へさせられた。

(四十七)

「あゝ、然う言へばね、」

と小篠は氣も心も許した風で、上掻綾く居直つた。

「私、昨夜、伊達先生の夢を見たのよ。芝居の二重を見るやうな立派な座敷の高い處に、あの一樂のお羽織の裄の短いので、恁う腕を出してね、絹地へ繪を描いて居らつしやるの。……何うして行つたか知らないけれど、私が密とお傍へ行くと、振返つて御覽なすつて、

『お篠さん、よく來たな。御馳走をして遣らう。』

とおつしやるから、

『はあ、何うぞ。』と言つたの。

直に立つて、づん〳〵行らつしやる。圖々しく後へついて行つた

もんです、……とさ、夢だわね。其の先生の足許へ、繪の具皿がひよい〳〵と飛んで、歩行いて來るぢやありませんか。而して、何處へ行くのか知ら、と思ふと臺所へお出なすつたの。廣い〳〵、そりや綺麗なお臺所よ。——直に其の皿から、繪の具がどつと湧き上ると、青鬼だの赤鬼だのに成つて、すた〳〵働いて、組板を直すのもあれば、井を出すのもあるし、金歯を噛んで胡坐掻いて、はだ〳〵七輪の火を煽ぐのもあるんですよ。油が黄色く煮えてね、先生がお手料理で蝦の天麩羅をお拵へなさるんです。私が頂いたの。

『お旨い、お旨い。』ッて嬉しがつて食べるもんだから、先生が莞爾なすつて、

『お篠さん、あひ變らずだな。』ッておつしやつたわ。……ねえ、ですもの、お客に出てはならないぢやありませんか。これなら、お弟子の何だから、お臺所には置いて下さるわね。其のね、赤鬼青鬼

が、皆盗物のやうに、美しくつて可愛いの。先生は、あゝ云ふ豪い方だから、鬼が皆御家來なのね。そりや、よく働いたわ。些とも可恐くはなかつた事よ。お客たちより附合ひ可い、……最う私。」

と鳥が窘んだやうに又突伏す。順一は一種言ふべからざる悽怜の感がした。

「お篠さん、そんなに辛いかい。」

「察して下さいな。」

と寂しい品の可い顔して、それでも凭りかゝつて甘へて言ふ。

「怒つちや不可いよ。私もつひぞ此の頃ばかりは金子が欲い。」

もそりと、あの五枚を其處へ出した。而して笑はせるつもりで、自働電話に閉ぢ込まれた事から、古郷人の話をする……

と熟と聞いて居たが、褄を引いて、向ふへ開いて、些と更まつた調子で、

「先生。」

「應。」「……」

「前刻、あの風月の二階で、私を家内だ、と然う言つて下さいましたわね。」

「……、」

「ねえ、」

「つひ、つひ其の何だ、惡かつた。」

「否、嬉しかつた、私は嬉しかつたわ。ボーイも相撲取も、後ぢや奥さんと言つたのね、も、一生に唯た一度でせうよ。其のね、先生、」

「……」

「家内と言つて下すつたお禮に、私や貴下を男にしたい。まあ、恁う言ふと、差出がましいやうだけれど、何うぞ、此の、私が頂い

た此のお金子は、其の、本郷で、西洋料理の屋臺を出してる御夫婦に立替へて上げて下さいまし。……聞けば其の御新姐は、五ッになる男の兒の手を曳いて、乳呑を抱いて居なさるッて言ふぢやありませんか。――而して迎ひに出た主人の方も、路頭に迂路々々してるでせう……其の御新姐が義理知らずで、貴下を棄てたのなら猶更ですわ。

私のやうな意氣地なしが、言はれた義理ぢやありません。實際欲ひ。父親は内に大病だし、私は身體に借金ばかり、成らう事なら、小指を切つても取替へたいお金子だけれど、……又其だけの金子ですから、其の人たちに上げるのに張合があるぢやありませんか。先方が不實なら不實だけ、――そんな時には氣前を見せるもんですよ。……何のために江戸兒の情婦がついて居ます。」と屹と言ふ。

(四十八)

直ぐに、忘れたやうに莞爾して、

「……まあ、お耻かしくつて、お話は出來ないんですけれど、こんな時だから言ひますがね。心持を惡くなすつては可厭よ！可うございますか。

私に何なの、あの許嫁の從兄弟があるんですよ。」

と茲で話した。……

「與吉さんと言つてね……今はね、芝浦の方へ引つ込んで、天秤を擔いで居ますがね、多町の可い加減な處の若旦那で、そりや大人しい可い人よ。其を私は嫌つたの。自分がこんな風で居て、人を嫌ふもよく出來た、と言ふでせうけれど、……其煙草を下さいなね……あんな顏をしてさ。」

「あゝ、吃驚した。串戯ではない。實際謹んで聞いて居ます……」
と沈んだ聲をする。
「謹まなくても可い事よ、お寢轉びなさいなね。さあ、」
「いや、それ處ぢやない。然うすると？……」
「聞いて下さいな、……でも、何だわね、前方が娶つて遣らう
と言ふのを、私の方で可厭だ、と駄々を揑ねたんだから、まあ、嫌
つたんだとお思ひなさい。前方樣は迷惑でもさ。又お嫁にゆかれま
すか、考へて御覽なさい。
今でさへ何だものを、其の時分は、濱町の家で、一寸々々伊達先
生にお目にかゝれるんぢやありませんか。
父親は頑固ですけれど、そりや目のないほど私を可愛がつてくれ
ますし、母親は何も言ひなり次第。娘が斷つて可厭だ、と言ふなら
と、……最も、遣つ返しつで、隨分面倒な事もあつたんですけれ

ど、何うにか極つて、破談に成つたの。
父親の兄と言ふ人が、——伯父だわね、——其の後亡くなりまし
たがね。それは何うも丁見の狹い人で、私の其の事を根に持つて、
久しく繰廻してくれて居た。些と絡つた、二千圓ばかりのお金子で
すがね、……耳を揃へて返せと言ふの。
『娘に知らして、此がために多町へ嫁くと言出されては、身を賣
らせるも同一だ。言種が氣に喰はねえ、叩き返せ。』
で以て、私にも知らせないで、隨分左前だつた處を、すつかり緣
切りに返したんですつて。……其のためと言ふんぢやありません
けれど、何の彼ので、濱町の家を曳むで、私はあゝして砂子へ奉公
をしたでせう。……
父親は何にも言はないで居ましたけれど、……內證で、母親に
聞きましてね、私が嫁かなけりや金子を返せ——隨分だと思つたの

よ――其の後行通ひも碌にしなかつたんです。

昨年ねえ、あゝ、砂子で貴下にお目にかゝる五六日前でしたつけ。皆が盡寢をして居ると、私は何だか寢られない。……自分の簞笥の前へ坐つて、引手に、あの先生の蚊遣火の懸物を掛けて、熟と視めて居りますとね。お亡なんなすつた方だ、と思ふ氣の所爲か、それが送火のやうに見えて寂しかつたの。夏だけれども心細い。拭掃除から、忙しけりや皿小鉢の洗ひ方、朝晩人の機嫌を取つて、何時寢るやら起るやら分らない、奉公の辛さが身に泌むと、……つひ里心が起つてさ、内が戀しくなつたでせう。……悄然と下階へ下りて、入口へ立つたんですが、おいそれと出歩行きの出來る身體ぢやなし、あの兩方の覆簀戸で、何だか私は……」

と言ひかけて、聲が曇つて、

「籠の鳥より詮果敢ない、蟋蟀のやうな氣がしたわ。緣日で買つ

て來た、貴下も覺えて居らつしやるッてね。彼處の鉢の、白い桔梗を、戸を開けて出る元氣もなしに、覆簀越に茫乎視めて立つて居ると、密と格子が開いたでせう。

默つて入つて威かす氣か、人の氣も知らないで、と振向きもしないで居ますとね。

『もし〳〵、』

ッて呼ぶのよ……

『もし。御免下さいまし、姉さん、あなた、お篠さんぢやありません。』

とさ、……覺えて居たわね、よく！……あの其が多町の與吉さん。……炎天を蝙蝠傘なしで、汗ぐつちより、まあ、見すぼらしい態をして。」

(四十九)

「二階の小座敷へ通したんですよ……何しろ暑いからと思つて、氷と水菓子なんか電話で言つといて、手拭を絞つて遣るとさ。

『あゝ、勿體ない、何うも、』……なんて、芳町、柳橋を面當にも荒した人が、羽織なしで顔ばかりぐい〳〵拭く。……恁う單物の袖がよれ〳〵に腕へ煽いてるつて風なのよ。浴衣を出しても着ず、團扇で煽いで遣れば、べた〳〵と叩頭をする。而して何か言ふ前後には、叔父さんにも、叔母さんにも、叔父さんにも、叔母さんにもつて言ふのがね……其が何なのよ……何ですかね、胸へキヤキヤ可懷く響くでせう。えゝ！飲まして遣れ、と間に合はせのお通しもので、ビールを出して、

『まあ、』

と言へば、

『堅く禁酒でございまして、全く、否、全く不可ません。……何うぞ拜借。』ッて、私が其處へばつたり置いた團扇を拾つて、一寸頂いて、胸を開けて煽ぐ工合が、落魄れたもんだわね。

可哀相に成つてさ。伯父さんも飛んだ事をなさいましてね、と其の時分はじめて言ふ始末。隨分えばらくなんですもの。

『與吉ちやん、此の頃は何うなさいました。』ッて尋ねると、……：可い機時と思つたかして、外の事でもありませんが、家中を一ッ助けて頂きたいと思ひまして、叔父さん叔母さんには內證でございますが、とのつけから切出して。……詰まり何だわね、立行かない家の整理をして、商賣をはじめる、最も自分で天秤を擔ぐ決心だからつて、五百圓金子を借りるのに、私に判をしてくれろ、連帶に成つて欲いと言ふんです。

貸手が何故か、私が判を捺すのなら、千圓の證文で、八百圓は貸すと言ふ。ですが、五百圓あれば足りるッて、手を支いて頼むんでせう。

考へたわね。……

まあ、何しろ思案を極めて、二三日の中にお返事をしませう。

『與吉ちやん、兎に角惡いやうにはしませんから、否、言ふもんですか、親たちには、』……と然う言つた心の裡ぢや、判も捺さうし、――まあ、最う些と――考へた事があつたんですよ。可ござんすか。

では、一ッ飲ませて、と思つて、

『可いぢやありませんか、前祝に一口、』とまで勧めたけれど、……堅く矢張り禁酒だと言ふでせう。其も何だか頼母しくつて、可かつた處が、雑と話もついたものと喜んで、そわ〳〵して、歸りがけに、恁う言つたの――、お聞きなさいよ、――簞笥に掛けた其の掛物を見てさ。

『十種香の段ですかい、お篠さん。』

……私や最う悚然として氣障に成つたの！惡い氣ぢやないだらうけれど、うまれつきなら仕方がない。

でも、まあ考へたわね。……其を氣障がるも我儘か知ら。――恁うして、一生、意地を張つて居た處で、張合のある操ぢやなし、と掛物を見ると悲しくなつて、一厨、與吉さんと夫婦に成らうか、其の人も、最う辛抱人。私で金子が出來るのなら、五百の上へ最う二百圓も拵へれば、八百屋でございと言はせなくつても、小體に店も張れやうから、と二晩ばかり實際寢ないで考へたのよ。

其處へ、あの、津川さんが、貴下を連れて見えたでせう。先生、」

と順一の指を、ぐいと引いて、切の結目に皓齒を當てた。

「……手切がはりだ、何うなるものか、と直に五百圓の證文へ。其だつてさ、まる切損をさせられやうとは思はないし、前方だつて頼みに來たくらゐですから、確な當のあるやうに言ふんだわ。判だつて、今に成つて思ふほど、可恐いものとは思ひませんもの。

『此處と此處へ……此處へも捺すんですか、此で可うございますか。』

ッて、べた〳〵捺したの？利息ばかりで、現金だけ、最う……二度も私が拂つたのよ。…　母親にも譯を話して、手傳をして貰つて、苦しい中へ借金させてさ、どんなに叱られたか知れません。そんな、こんなで藝者にも成つたけれど、前方を怨みはしませんよ。」

廻舞臺

(五十)

「誰の困るも同じ事、と然う思つて、して遣つた事ですもの、不義理をするとしないとは、其は前方の勝手でせう。

考へて見れば、伯父さんが、意固地から、私ン許の家藏を賣らしたやうな中なんですよ。……でもねえ、名ばかりでも許嫁と云ふんですから、好嫌ひは此方の勝手よ、厭なものは厭なんです、そりや我儘でも構ひはしない。

ですが、義理は義理なんです、頼まれて出來る事なら、して遣らなければなりますまい。

ですから、貴下も、其の方たちに、して上げて下さいなね。一旦

私に下さると云つたお金子、決して貴下のお小遣ひになさいとは言ひません。それは可厭。……否、もう一つ、別に工面をして下さるなら……其を私に下さいましな。ね、其の方たちは東京へ來たてゞしやう。方角も分らなくつては、眞個に可哀相だわ。――東京で難儀をさせると東京が怨まれる。……田舍の人に嬉しがらせてお遣んなさいよ――私に寄越すと其の方たちに上るのと、どつちが可か、聞いて御覽なさいまし、伊達先生は何ておつしやる？」

順一は、はつと俯向いた。

「女が憎いの、襟元についたのッて、襟元についたものは可哀相だと思つてお遣んなさいなね。何うでも可わ、そんな事は、其の代り私がついてるぢやありませんか。」

と摺寄つて又膝に置く、手を取つて、順一ははら〳〵と落涙する。階子段に跫音がしたので、小篠は默つて、其の紙幣を、一寸頂く

異似して、順一の懷中へ入れながら、裳を浮かして、するりと摺退く。

十九貫六百目が入つて來た。衣紋を咽喉輪でひよいと綏めて、一つ頃でしやくつて、

「大分、お靜でございますね。」

「これから浮かれる處なの、」と小篠は三味線を引寄せる。とどたりと膝を支いて、中腰で目をぱち〳〵、

「お前さん、」

と仔細ありげな、滅入つた調子で、

「斷り切れないよ、……私は。前刻から、あの通り引切なし電話だもの、ね、だから……一寸でも、」

「もう遲いわ、」と言ひながら、手にした撥を、薄く坐つた膝へ落す。……

「遲くッたつて、其處はお前さん、勤めだあね、ね、あれもあるし、そらね、あの事も……それ、いつかの事も、」

と言ふのが、一ッ〳〵責道具で、土塊場の俵を犇々と積むかと聞こえて、小篠のがつくりと俯向いて、兩手を胸へ、肩を落して、兩袖の細くなるのが、縛めの繩目に引占められたか、と無慘なり。

抜衣紋で、ねち〳〵、

「でせう、だもの、お前さん、ねえ、稻木さん、」

と額で見越す。

「まあ、一ッ獻げやう、」

「えゝ、」と氣のないやうに、盃を受けながら、直ぐ其の額で黑く睨んで、

「一寸、何なさいよ、……稻木さんだつて、分つた方だあね。何も御自分一人のものと極めて居らつしやりはしないしさ。……ね

え、貴下。」

順一は少からぬ侮辱を感じて、聲もやゝ激しく言つた。

「お出掛けな、おい。」

ト其の懷手で、可厭だと、ぶる〳〵と身を震はす……駄々を捏ねるやうに娘めくのが、筋を絞るばかりに果敢ない。

「串戲ぢやありません、些とは苦界だ、とお思なさいよ。……何時までお嬢さんで通るものですか。八方詰まつた身體で居ながら、然う我儘ぢや私が困るわ。私が、……ね。でも私は私さ。他は皆他人の中に居る、お前さん身體ぢやないか。金子が敵よ、ねえ、旦那。……其の言の終らぬ内、小篠は拗ねたやうに衝と立つて、突放すばかりに出やうとした障子の際で、三味線を杖に、裾をやゝ斜に引いた、すらりとした姿で留まつて、象牙の撥を額に當てゝ、伏目に密と見返つた、承塵の額の影がさす、ソレ其の鬢の濃いのが戰の

いて、顔の色の惡い事！

「直き歸ります。……雛子さんに來て貰つて待つてゝ下さいな。」

と撥の尖で、前髪をぐい、と搔く。

「いや、又來やう。」

と順一は、それでも敏く帽子を引掴んだまゝ突立つた。

「惡留せずとも離せでせう……後々がお樂みでさあね。」と忽ち笑顔れた御機嫌の體で、於登利は猫のやうな手つきでちよつかい。

で、前に座を立つた、小篠に却つて送られて、下階へ下りたが、早急だつた處から、小女が出て來る間もなく、小篠が撥を帶に突刺したなりで、下駄棚から順一の穿物を出して、序に自分のも其處へ、カタリと白い手。

杖を握る袂を、一寸取つて、低聲で、

「御機嫌よう。」

「お傘は？」

と十九貫が、小篠の上へ押冠さるやうに立擴がつた。

「雨は留んでる。」

何うかは知らず、心の闇へ、石礎の如くドンと出る。

硝子戸を占めた途端に、木挽町の曲角から、もの〻半町とはない、於登利の軒へ、宙を飛んで、矢の如く、がら〳〵！と着いた腕車がある。

ト黑雲のやうな外套を着た男が、渦くばかりに躍り出づる、と凄じい音で、戸を開けて、

「於登利！お篠の奴ア此家に來て失せをらう。」

と怒鳴込む。其の跫音まで、横木戸の暗へ身を躱はした。順一の胸へ釘打つばかり響いたのは、五坂熊次郎入道青嚴であつた。

(五十一)

「まあ、何うせうね。」

と姉は、私の話を此處まで聞いた時、惡寒がするやうにわな〳〵しながら、身動き激しく、がッくりと横に寢返つた。

「フ、ンと一つ嘲笑つて、私なら鼻唄で歸りますさ。チリチンとか何とか、そゝつて。」

「そりや、酷いわ、そりや孝さん薄情ぢやないか。」

「……薄情、何も薄情なことはありません。」

「だつて、そんな人につかまつて、何うなるでせう、私は聞いて居ても氣が揉めて仕やうがない。」

「何も六ケしいことはありませんさ。たか〳〵お伽をする分の事です、――で、まあ、何うせ野郎はのろいんだから、貴下、私ねえ、

とか何とか鼻聲で、四方八方借金を拔くかね、殘りをお小遣にして、情人と對向ひで、鰻で茶漬る……」

「まあ！」

「其のかはり相手が違ひます、對手はお篠さんぢやない、……私のは雛子つて言ふんです、少いのに自前でね、抱妓の二人もわらうと云ふ働きものさ。」

「可厭だ、どんなに美人なの、」

「何故？」

「でも、お篠さんは、そんなに困つて居なすつたのに、同じ藝者で、」

「姉さんも可い氣なものだ。容色や藝で、今時の藝者が立ちますか。御聞きなさい。雛子の方には、月々たんまりお手當の出る旦那が三人さ。……最う一人あらうも知れぬ。其の外、色男もいづれ

あらうし、客は勿論。私の言ふことを肯いたくらゐだから、誰にでも一寸々々轉ぶ。」

「まさか、」

「否、現に於登利ぢや、二階へ一人其の旦那が來て居て、下階には鷲鷲の懸物を斜に睨んで、私が控へる事が毎度あります。驚きませんな。女も、一寸今何だから直きよ、と澄まして居れば、宜しく頼むぜ、なんて此方も平氣さ。恰もこれ兩牡の犬相丼んで、一匹の牝を追ふが如し。何うです、人間同志恁う悟りを開いて了へば六ケしい事はない。中には可厭なのもあるだらうけれど、幾千金にはなると思へば、些と毛色の變つたのも異だぐらゐで目が瞑れる……但し凡て人間らしい扱ひはしませんね。待合の媽々なんざ、勤工場のゝ賣品氣取だ、此の方は些とお品が宜しい、なんてね。又……

……今日は些とお間に合ひかねます、明後日、と紺屋丼に口を利く……

何うです、凡そ女が、可厭な奴でも金子で自由に成らうと思つて、斷念を着けさいすれば、天下に面倒は少しもない。其のかはり女なんだか牝なんだか、其の邊は覺束ない。」

「そんなに惡く言つて、孝さんは、其の人をお嫁にする氣ぢやありませんか。」

と姉がまた憂慮しさうな目をして仰向く。

「平生景氣に言ふのさ、洒落なんだよ。眞面目だつた日にや此方も牡だね。……第一旦那が二階へ來て居る女を、女房に出來ますか。考へて御覽なさい。たとひ口約束だけでもです。女房に成らう、云やうと言つて、其の上見す〳〵他に客のある事が分つて居た日にや、知つて居て女房に旦那を稼がせるか、美人局も同然だ。洒落だから構ひはしない。此方は蜻蛉を釣る氣です。藝者イコール達磨木

兎犬張子だから可いけれど。……もし假にも事實女房にしやう、成らうと云ふなら、口へ出した、其の場、其の時限り、斷乎として他の客は取らせませんね、旦那も七里潔排だ。其が出來なけりや止す分の事。又表向其のつもりで、內證で男を拵へりや、忽ち密通の扱ひです、情男ならくれて遣る、客ならば四つにする、旦那なら、へん、此方が逃出す、……」

と言ひかけて、旦那も客も情男も……私もある、……其の雛子と言ふのゝ、淑女らしく貞女らしく、然も眞面目に澄まして居る處女らしい顏色が、弗と蚊帳の目へ浮んだので、私は獨りで笑ひ出した。……

「眞個？孝さん、ぢやお嫁さんにするのなら他の人は止さすんだわね。」

「勿論、」

「あゝ、安心した。お嫁にするなら然うなさいよ。」

「出來ない。」

「何故？」

「出來ませんとも。直ぐ其場から止させるなら可、藝者で居る內然うした日にや、其こそ今の、お篠さんの境遇になる。……最も、あの人のは、順一さんが然うした譯ぢやない。……伊達先生と言ふ神業の本尊があつて、男を寄せつけなかつたさうだけれど、ね。さあ、然うなると、野郎は些と持て餘す——女の操を尊んで、もし其の操を奪はうとする敵があつて、女の力が足らぬと成ると……男はために、生命がけに成つて戰つて遣らねばならない。

ト女が待合へ殘つて居て、五坂が其處へ、狒々の荒れたやうに成つて、躍り込んだとすると、何うして——鼻唄ぢや歸られません。」

「順一さんは何うおしなの？……孝さん、お前さんなら何うす

るのよ。」

「困つたな！……此奴が雛子だと翌晩祝儀を達引かせる處だけれど――前方がお篠さんなんだらう。女が小篠で、私とすると、其の場合、……まあ、然うさね。巡査の假聲を使つて表を敲く、可評しいな。急病だと言つて引返して、餘所ながらも……不調いなあ。チョウ儘よ、私なら出刀庖丁だ。向顱卷で飛込んで、女を攫つて駈落さ、邪魔立する奴あ刺通す……」

「そんな事より、順一さんは？」

「あゝ、姉さん。」

と聞返した……

「何かい、四月の末……其頃さ、夜遅く跣足で歸つて來た事があるかい。」

「あゝ、ざざんした。」

「で、何と言つたい？」

「指は西洋料理で。それから酔つて居て、途中で溝へ踏込んで、片方取れないから、兩方とも打棄つて來たんだつて、」

「窮したりと謂つべし、……指を切つて溝へ嵌つたは情ない。それ〳〵姉さん其の時ですよ。……

腕車はね、五坂を下ろすと、直ぐ引返して了つたとさ。こりや急には歸らない、と思ふのが最う彼是十二時でせう。尙氣が氣ぢやない。隣の壁腰に、氷りついて立つて居たが、堪らないから密と行つて、通り越して、又引返して、二三度胡亂々々しながら、例の其の扉、硝子戸の龜裂が入つて機關のやうに破れた處から、内證で覗くと、寂然として、五坂のは固より、今小篠が自分で出した、其の駒下駄まで影も見えなかつたのには慄然とした。

それは未だ可い。土藏腰へ投首で又立つと、カタ〳〵、と跫足が

三和土に鳴る。あゝ、歸るのか、と思へば、澤ちやんが、顔を出して、通りの兩方を覗いた後を、掛金をガチリ……は何うだらう。

『えゝ』と思はず聲を絞つて、杖で地を打つと、カッキと石に當つたはづみに、ぱつと物凄い火が暗夜に燃えた。

其の杖をポロリと落して立竦みに成つたと言ふ。

少時して、まだ其でも未練らしく、戸を引いて見たんだとさ、動かない。で、力を入れたが、ぎつしりして居る。開かなくつて僥倖です。……此方の勝手ぢやあらうけれど、もしか、其が鎖つて居ないで、がらり、と開いたら、何の面さげる氣だつたらう！

然うした順一でもなかつたが、考へて見れば氣の毒だね。

焦々して苛立て、足踏して、爪も通れ、と握り占めた拳が、べつとり！冷々するから、雨が溜つたのかと思ふ？……其の間絶えず糠雨なんだらう。凡て蕪村の化傘以來、雨の降るのは禁物です。

ト見ると、宵に最う留つて居た指の疵から、流れる樣に歪々と血が出たとさ。……

さら〳〵と音がして、雨垂れが、……其の土藏腰と、於登利の軒燈の間に、忍び返しの着いた、見ると一間ばかりの木戸がある……其木戸へ染込むだやうに聞えると、密と開いて、姿が横に成つて出たと思ふと、ひたと身返しをして、すた〳〵と跳足で驅出すのが小篠ぢやないか。」

(五十二)

「あゝ」

と姉はがつかりして、

「まあ、可かつた……」

「いや、義兄、人魂が誘はれたやうに、ふら〳〵と出て、ひつた

り附着く。……肩と肩で、
『何うした。』
『助かりました。影身に添つて下すつたわね。』
『可いかい、一人で。』
『其處から腕車で、あゝ、話がして居られません。追掛けて來やうも知れない。然うすると見つともないから。』
『ぢや、急いで、腕車まで穿いといで。』
で、ぴたりと其のまゝ下駄を脱ひでね、小篠より眞前へ順一が驅出す。
『稲木さん。』
『……』
『御機嫌よう。』
とうるんだ聲を聞棄てに……

これだもの！さあ、當分、順一さんは憑物がしたやうに茫乎したり、そわ〳〵したり、何だかきよとついて居たゞらう。姉さん、堪忍して聞いてお遣り。……」

(五十三)

で、又五坂が何うして於登利を知つて居たかと言へば、何も紳士が待合へ飛込むのに、敢て遮るものはなからうけれど、何だか樣子が、初手から其十九貫を懇意らしい。其の筈で、お篠と一所に、砂子に居た時分から、五坂は其處の常得意。

然も於登利が、房州、濱町、築地から此の木挽町へ、道中双六の目を出して待合を開いた、其の資金は、實は五坂から出たのである。

これにはお篠が囮と成つた。

御存じの通り、情立てる男は確にないが、お嬢さん氣の失せない

我儘から、男嫌ひな、あの人を、御恩返しに私が口説落しませう。で、いづれ貴客の持物になる女に、水仕事なぞさせて置くより待合を出させてお遣りなさいまし。すると、お篠さんと私とが共同で、篠鳥とか鳥篠とか、但し、お差支がなければ、熊篠となりとして軒燈を上げませう。二人とも……砂子では名取りの女中、やがては御損も掛けますまい。

年増をお口説きなさるには寶を見せるに限ります。

と、於登利は五坂へ持掛けて、お篠には、又利害を説いて、其の口からも頼み込ませた。

入道青巖二つ合點。

忽ち待合ひが出來上る、と其の座敷開きに、お篠を靡かせやうとして、硝子盃に水指まで幷べたので、袂を拂つて出て了つた。……

：お篠も實は正當の金方がついて、於登利と共同して商賣をするつ

もりで、簞笥、鏡臺、茶道具から、娘の時の寫眞まで、自分の所帶と、親たちからも祝ひかた〳〵讓られたのを、於登利の内へ持込んで、其處を住居と思つたのに。……

綾があつたに喫驚して、身體ばかり拔けた始末。當時まだ大概殘つて、順一も知つてる、湯呑などは、……お篠が自分のを待合の藏から出して、使はせて居たのである。

五坂たるもの、默つて居やうか！

けれども、御恩借の金子全額は、證文を書いて私が印紙を貼ります。一旦はお篠さんが、内々承知をして居ながら、其の場に成つて心變りをしたのが惡い。

と塗りつけて、去かし長い目で御覽なさい、じり〳〵と詰寄せて、いづれ貴下のものにしないでは、此の於登利が棄置きません。利息の上へ一式の御恩返し、とニヤ〳〵とするものを、青巖入道も手が

着けられぬ。

で、まだか、まだかと美しい犧牲のみを迫る。……

迷の辻

(五十四)

「と、然う云つたわけをね、雛子が知つて居て私に話したんだよ。是から話すがね。……愈其の櫻之實一件の晩さ。そら、順一さんの杖の脈を引いて、私が奥の六疊で、一組の方は、二階に閉籠つた其の時だね。――

伊達先生の其掛物が懸つて居たので、妙に私も氣が締つてね、……其の内雛子も來たけれど、平時のやうぢやない、そんなに膝も崩さないで、ひつそり飲んで居たとお思ひなさい。

何處かで泣き聲がする。いや、何處かぢやない、直一間置いた隣の茶の室らしくつて、聲は立てずに、音を忍んで、泣いじやくりをするんだね。

『小篠さんが泣いて居ますよ。』

と密と耳の處で、雛子が言ひます。

私も蟲が知したのか、すぐに其がお篠さん！何うも小篠らしいと思つたので、初めから小女なんぞぢやない事が分つたんです。

『何だ、何だらう。』

『大抵分つてますわね、又何か氣障を云はれて居るんでせう。此處の女房さんも隨分だよ。前のお主をつかまへてさ。否ね、小篠さんが、あゝ云つた人でせう。其でなくつてさへ、まるで人を受けつけない處へ、貴下の義兄さんが出來たんだもの。

其も可いけれど、あの人も、父上は病氣だと云ふし、着物から、

お小遣さ、附合は張る、悉な稼ぎぢや月々の芝居の義理見物にだつて足りませんもの。……然う云つちや悪いけれど、まるで相談が出來ないんですから。お座敷だつて宴會の一座か、前からの馴染が、ぽつ〳〵義理で來るぐらゐだもの、追つきませんわ。つひ、借金をするぢやありませんか。

借金をするたつて、身體はあの通り、弱い人だし、三日にあげず煩ふでせう。當のないのに、然う主人だつて貸しはしない。そりや氣の毒なやうに苦しがつて、五十錢だ一圓だつて母樣にお小遣を借りるんですつさ。今時、親にお小遣を貰ふやうな、そんな蕊者はありはしない。てッて惡く云ふんぢやないの。客取りをしないと思ふと、お身裝は麁末でも、金剛石の指環は嵌めてないでも、何となく清いわね。威があつて、品があつて、それは何よ、口惜いが一座でもした時は、私はじめ頭が下る……

ですが、其では當人が立行かない。切端詰まるもんだから、外で最う都合は出來ず、……詰りはね、此處の女房さんに借りるんですとさ。判を捺して貰つたのも隨分あつて、其の利息ばかりでも、月々十五や二十ぢや濟みませんとね。

又女房さんが貸すんです、……と云ふものは、其處に的があるんだわ。』

と尙密めいて、五坂の事を、此處で雜子が話してね。……

『……ですもの、其氣があるなら、眞個は小篠さんが此處の御主人になれたんだわ。今ね、女房さんの取持ちで、小篠さんが云ふ事を肯きさへすりや、五坂さんに借りた分の女房さんの借金は、自然帳消しになるんだわね。其があるから貸しといて、じり〳〵じりじり責めつけるんだわ。出來ない相談をするんぢやない、お前さんの心一つで、黄金の山があるのぢやないか。それを見ながら、人を

苦しめてさ、もう私は立行きません、助けて下さい、後生だからなんて下から出て拜んだり、いづれさ。……馬鹿にしてるよ、義理知らず、と怒鳴つたりさ。屹と又責められて、其で泣いて居るんですよ。』

『ちよつ！困つた野郎が着いてやあがる。其にしても苟くも客だ。義兄が二階に居るものを、其の對手を泣かせるなんて、……人を馬鹿にした肥満奴。』

と十九貫が癪にも障れば、あの、纖弱いのが可哀相だ。」

（五十五）

「一體どんな熱を吹いてやあがる。待てよ、で、雛子の奴が氣を揉むのも構はないで、權柄づけに吩咐けた。

目配せを合圖に、ソレ一二ノ三、で雛子をはゝかりへ立たせる仕

組で、其方の戸を開けると一所に、此方の襖を密と開けて、隣の室へ忍び込むと、あとは隔てが唯一重。

兩方が密々でも、大概は聞取れる、……先生の懸物々々と云ふのが處々へ入つて、……えゝ、然うですとも、勿體ないでせうともさ。何うせ私ン處は地獄宿だから……あゝ、口惜い、あゝ口惜い！地獄宿だと云はれたのは初めてだ、と於登利が搦む。誰も、そんな、失、禮、な、事は云ひませんと、切々に聞える、と、……だつてお前さん然う云はないばかりぢやありませんか。良人が、そんなものが好きだから、一寸借て掛て置きや、一旦承知をして貸ときながら、三日も立たないのに持つて行かうなんて、言種が何です。勿體ないとは。

でも、皆さんがお遊びなさる處だから、……と含んで掠れた小篠の聲。……えゝ、然うですとも、お遊びなさる處ですとも。

誰人も人一倍席料を出して、汚くお遊びなさいますのさ。お綺麗なのは貴女ばかり。お顔もお綺麗なら、お身體もお美しい。其の代り一方ぢや又隨分と御勘定に汚いとをなさいます。やれ、於登利さん、それ女房さんで、御勝手な時はお姫様御用金だ。まるでお主へ忠義のため、こんな下つた稼業をして利息を拂つてあげてるやうなもんぢやないかね。……第一何だ、お前さん、二人で待合を出さうと云つて、大金を借りときながら、いざと成つて御都合で厭氣がさしや、そつくり私に押着けてさ。然うかつて看板まで出したものを、留められはしないしさ。……まるッ切私一人貧乏くじを引背負つて、誰方か高みで見物だよ、……遣切れるもんぢやありやしない。

いや吐いたもんです！

そりや女房さん餘りだわ、と小篠が、其中でもさつぱり云つた。

何が餘り……と押冠せて、何が餘りさ、何が餘りだよ、お前さん、

其の證據にや證文が入れてありまさ、五坂さんに借りて見せやうか、え、見せませうか。私ばかりの名で丁と證文が入れてありまさ。突着けて見せやうかね。餘りだ、何が餘り！舊の御主人だと思やこそ、百に九十九まで蟲を壓へて、おはい〳〵で居りや可氣に成つて、附上つて、何が勿體ないんですよ。其方こそ罰當りだ、第一すべき事もしないで置いて、偶に良人が樂みに借りたものを、返せなんて云はれた義理かい、お嬢さんが聞いて呆れら。

ヒイと小篠が聲を殺して泣伏した。

私の血相を、向ふで見ると、襖際に立つてた雛子が、頻に拜む。

ト島田の上へ、伊達先生の畫が見える。

待て、其の方から取懸れで、……雛子の留るのを突飛ばして、先づ懸物をくる〳〵と捲いた。

で、ぐいと内懷から袂へ落して、のんだもんです。

『忽然として消えた、と然う云へ。己が承知だ。構ふもんか、汝の一命にや障りやしないや、だが情人の身の上だ、間違つたら、雛子、逢引きねえな。』

『そりや、そりや可いけれど、貴下今彼處へ飛込んぢや可厭よ。……後生だから、拜むからさ。いづれお金子の事ですもの、……素手ぢや貴下の顏が立たない。ね、素手ぢや男の顏が立たない。』

成程、云はれりや道理で、此方が最う大分借りてる。が、忌々しく、癪に障つて、何の道、遊んで居る氣はないから、大手を振つて、ぢッと出ると、其の茶の室の前を通る。

ト此處は薄暗い洋燈です。向ふの障子を開けた敷居の上に、差向ひの中腰で居る、……小篠は、と見ると、膝に前髪が着きさうにして、目を鼻紙で壓へて居た。が藝妓とは見えぬ、其の風が下町の御新姐が姑に苛められて居るやうで、あはれともいぢらしかつた。

『おい、女房、此の頃に借を返して、祝儀を出すぜ、雛子が證人だ。』

と一つ浴せ掛けた。」

(五十六)

「小篠が、そんな中でも、聲を聞くと泣顏を隠して、送つて出てくれました。

『孝さん、最うお歸んなさるの？ぢやお近い内に、……』

と言ふのが、弔辭に行つたものに挨拶をするやうに滅入つたがね、やがて、あの婀娜な聲で言ひ足しました。

『御機嫌よう。』

ト此の聲が耳について居て未だに忘れられない。

外へ出ると暗い晩です。何だかお篠さんはじめ、順一さんの事が

氣に成つて、直に歸れないやうな氣がしたから、ぢき其の角に出て居る、おでん屋の暖簾を潛つて、

『何うだい、景氣は、』

なんて、はじめから、暫時話込んで手間取らうと言ふ氣です。でね、炎込を横啣えにして、がぶ〳〵、一體胸氣でならないからね、茶碗酒を引掛けながら、別に於登利で、大きな聲でも聞えやしないか。其とも最う徐々歸るか。どの道、順一は迫込む筈はないから、十二時と云へば遲くも歸るだらう、と頻に暖簾から目を出して、きよろついたもんだからね。おでん屋が、

『旦那、何ぞ、おとりものでげすかい。』つて低聲で言ひます。……私はぎよつとした。串戲ぢやない。懷中に長いものが潛んで居ませう。

『何だ。』

『へゝゝ、おとりものがおあんなさいますかね。えゝ、此の邊ぢや、旦那方が一寸々々其のお張込みでございますから。』

はゝあ、分つた。で、少し氣取つた。

『むゝ、一寸出張つたのよ。』

『御苦勞樣でございます。えゝ、星は何の邊でございますえ、北で……南で……それとも天の川で？』

『おい、其の邊よ。』

ッて言つたがね、……何の事だか分りません。おでん屋の方が苦勞人なんだ。

『旦那え、毎度御贔屓を下さいますから、何時でも其のおつしやつて下さいまし。』

下働きをしやうと言ひます。

『まあ、もう一合燗けやな。』と調子に乘つて飲んでる處へ、二人

が悄然と出て來たがね。灯末で透かすと、手を曳いてる。お篠さんの方が、少し恁う、……凭懸つた工合でね。――順一め籍が弛んだぜ、辰巳屋のお篠さんもやきが廻つた、――何事です。が、見着かつちや不笑くないから、ひよいと暖簾から向ふへ廻ると……

『や、來ましたね。』

つて屋臺の背後の灯の蔭へ、及腰に成つておでん屋が面を出す。

可笑さは可笑いし、此方は、おでん屋の居處へ、蹲み込んで、屋臺で仕切つて、香を嗅ぎ〳〵、目ばかり湯氣の中で働かせて見て居ると、お篠さんは絽縮緬の單衣を着て居た、お端折でね、いゝ中年增でせう。暗さは暗し、髪は黒し、色の白いのがほんのりと、灯の前をスッと通る。……萬綠叢中紅一點で、背負上の燃え立つやうなのが、ちらりと見えた、義兄は、一件の杖で向側を幷んで行く。

……

ト曲角で二人で留まつて、何か、ひそ〳〵言つて居ました。

ひよい、と氣が着くと、おでん屋が見えますまい。おや、……

角家の羽目板に附着いて立聽をしたもんです。這ふやうに引返して、

『旦那、何ですかね、……こゝに二歩だけあるから、年坊に櫻之實を買つて行つてお遣り、と烏が言ふとね。鶯が、嬉しいわねッて涙聲で言ひますぜ。……可哀相に、內證の私生兒があるらしい。わゝした中で子が出來ちや苦勞をします。……品のいゝ容子のいい人達が、何をしたか知りませんが、子ゆゑの闇なら憎くはねえね、旦那、見逃してお遣んなさいまし。屹と其の兒が好きなんでせうさ、櫻之實を買つて歸つて、喜ぶ顏を見る前に泣を見せちや堪らねえ、……』

『然うよなあ、』

と思はず、私もしんみり言つた。

『えゝ、旦那。』
腕車が其處へ、すつと留まる、と義兄さんは、飄然と身を躱したもんだがね。」

(五十七)

「突然、飛んで下りたのは、お篠さんが抱へられた竹家の内箱だつたんだよ。……姉さん、此奴がね、凡て出入りの驅引をして、無理に座敷を貰はせたり、……病氣で寢て居るものを顏色で突いたり、何かする――體の可い舊の遊女の、遣手と新造を兼ねた奴でね。
『小篠姉さん、』と怒鳴るのが手に取るやうです。
『おや、お蟹さん、今歸る處だわね。』
『串戲ぢやありません、いくら電話をかけても懸けても、……誰だと思ふのさ、お客樣は、五坂さんよ！一寸於登利に根を生しては

困るぢやありませんか。滅多に後口が懸りもしないのに、なけなしのお茶屋も大事な客も失敗つて了ひますよ。御主人泣かせだ、眞個に！……榮燿に藝者をして居るんぢやアありますまい。……さあ、後は後だ、此の車で歸つて下さい、私や於登利へも言分がありますから……』
『否、於登利さんの所爲ぢやないのよ。』と言ふのが、切々に聞こえる。
『まあ、可いから、疾くおいでなさいなね、それへ乘つて、車屋の祝儀もないんでせう。』と言棄てる。
『はつ、』
と泣いたが、車の上から、
『お蟹さん、澄みません、私や住替へをしませうね。』
『抱へ手があるなら、御勝手さ。』

『畜生、冥土へなら可いぢやないか。』

照君を乘せた火の車が、謖謖輪で音もなく空へ走る。

と見送つて、お蟹が、

『ちよつ！似たもの夫婦だ、不景氣ッたらありやしない。』

私は猛然と躍り蒐つた。

『御用だッ！』

『ひえゝ、』と引呼吸で咽喉を伸ばすと、早腰を拔いて泥濘へぐたりと坐る。

や、これを見て一目散に遁て歸つた。」

（五十八）

が、何しろ私も靜として居られない、金子の工面も工面だけれども、差當り、二人が逢ふ處を算段しやう。最うあの樣子ぢや、於登

利へは遣られない、と思つて居ると、其の間もなかつた。

其晩、於登利に泣かされた聲は二階へも薄々洩れた。けれども、順一が聞いても、お篠は心配をさせまい、と思つたか、病氣の所爲か直に泣く、と笑顏を見せた。其の癖、伊達先生の懸物を、こんな內へ懸けて置くな、と注意をしたのは順一だつたのに……

で、お篠が、癪に取詰められたのも、順一は櫻之實ゆゑだ、と唯思つた。

飯は澄んだし、酒のあと、水菓子をと言つけると、別に誂へたでもなく、櫻之實が出たのを見て、お篠が白い指で一つ取りながら、目を腫ぼつたくして、……年坊が、今日も此を買つて、と强請つたのを、毒だと言つて賺して來た、蛇苺でもないものを……とほろりとするのが、露を落して實が光る。

そんな私でも姉さんと思へばこそ、二三日前に、近所の人に淺草

の四萬六千日に連れられて行つて、鬼灯を買つて頂いたのを、――もう自分のは一つだけになりながら、佳いのを選つて、藏つて置いて、姉ちやん、これ上げませう、大きいのを取つといてよッて、五つくれたぢやありませんか。私や紙入に持つて居る、其だのに、……と涙で語つた。

歸途の辻の立話しは、其の事で、……優しい貴下、一層の事、二人で其處等で買ひませう。其の櫻之實を持つて行つて、夜に成ると他愛がない。寢惚けて、もしや起きなかつたら、密と抱いても路次口へ出ますから、喜ぶ顏を見て下さい。姉弟中での容色よし、人形よりも可愛らしい、と又手を取つた。

其處へ箱屋が來たのだ、と言ふ……始末であつた。が、爾時の順一の懷中、二歩のほかには電車賃。で、お篠の小遣も察したので、直其の翌日、昨夜も歸宅が一時過……今日は宵の內に歸るつもり

で、三時些と下つた頃、戸外を忍んで於登利へ入る。

三和土の處で、殆ど一處に、小皿へ姫のりを買つて入つて來る、女中の澤に逢つたのである。

なよ竹

(五十九)

女房は？

「一寸近處へ用達に……」

で居ないと言ふ。最も此の日、十九貫於登利が居れば、何とか口實を拵へて、順一を上げなかつたかも分らない。……後で知れたが、……其の出前と言ふのが、同じ居廻りの待合で、……昨夜、お篠を迎へに來ながら立寄つた、竹家の內箱などゝ、言ひ合せが出

來て居て、たとひ、じたばた騷いでもの勢ひで、五坂入道を取持ながら、お篠を其處へ引着けて居たのであるから。――

雖然、一體順一は餘り足の近い方ではなかつたし、昨夜の其の日で、よもやと思つたものと見えて、別に小女に內意を含めて置かなかつたものらしい。

家中寂として居たが、其でも廣間の方には、お約束があると言つて、順一を通したのは小座敷の六疊室。

此處が化傘の難場である。

此の蕪村、然までの名畫でもあるまいに、其處へ坐る、と最うばらばらと降つて來た。が障子が嵌つて居らぬ。簾にはまだ早し、開廣げの窓の外が、直に隣家の瓦屋根で、何屋か知らず、見た目も暑く、……賽の河原の燒跡のやうに、一面に炭團が干してあつた。……澤が袁花を持つて出て、今日は障子の張替へをするんだ、と言つ

た。

別に降り込みはしなかつたが、其の屋根から、も一ツ上の物干へ、何か取入れに上るさうで、毛むくぢやらな脚が窓へ下つて見えたから、雨戸を閉めて、薄暗い處に坐つて、偶と見ると、其の雨戸の面に、

と朱で書いた御札が一枚貼つて有た。其を所在なく熟と視める內に、何故か頻に氣が滅入る。……

「姉さんは、あの出て居らつしやいますから、聞いて御返事をいたしますつて、」

「可、」

と言つた切で、去ばらくして、――

「澤公、奉公は辛からう。」

「はい。」と妙な顔をしたが、其の意を得たらしく差俯向く。
「こんな處に居て、見やう見眞似で、必ず藝者になんぞなるんぢやないよ。」
と何の氣なく言つて聞かす、とほろりとした樣子で、
「はい、小篠姉さんも、何時も然う言つて下さいます。眞個に優さしい方ですわ。私が病氣の時なんか、女房さんと喧嘩をして、休ませて下さいました。早く行らつしやれば可うございますわね、私も何時でも待つて居ますの。」
「お世辭が可いな、さあ、御褒美。」
と小遣を渡して、
「何しろ、お酒を持つておいで、雛子は？」
「えゝ、それが、あの、彼宝の座敷へお約束でございますの。」
で、一人で手酌で飲んだが、些とも醉はない。待つて居ても返事

が來ない。

(六十)

手紙にして小遣を包んで歸らう。可、と小抽斗のついた硯箱を取寄せて、蓋の埃を拂いて取つた。水入を、ト振るとない。其處で盃洗の水を落して、卷紙を開いた。
一筆申殘し候ふ……
と偶と書いたので、はつと思つて、びりゝと裂いて棄てた。雨戸を開けると聽て最う薄暗い。……立續けに五六杯、息も吐かずに飲んだが、水のやうで而して苦かつた。
電燈がポーと點れる。
澤が、ばた〳〵と驅けて上つて、
「姉さんから、お電話。」と嬉しさうに勇んで言つた。

其の日は何故か、眞暗な、夢のやうな電話口で、

「あゝ、貴下、」

とお篠が直き其處。ずつと聲が遠退いて、

「蟲が知らしたんだわね、よもやとは思つたけれど、一寸ね、あの……間を見てね、掛けて見たんですよ、掛けて、――澤ちやんが、……來て居らつしやるつて。――内ぢや默つて居るんですものの。」

と尙沈んで、

「何うにもして行きますからね、えゝ、あゝ、一寸でも、屹と待つてゝ下さいよ……屹とよ！可ございますか、夜が明けても。」

と……幽かに笑つた。

「御機嫌よう。」

……と聲が消えた……順一は其れ以來、夜更けて、あの、ぼつと立つて、明い鬼のやうな、――何處のに限らず――自働電話の中へ入つて、密と受話器に耳を當る、と確に、お篠の婀娜な聲で、

「御機嫌よう。」

と言ふのが屹と聞こえる、と言ふのである。……私も聞く……

待つ間の手すさみに、其の卷紙へ、一枚、二枚、篠の葉を描いては消し、描いては消す。……と隣座敷で、然も甘へたやうな、可懷いやうな、嬉しいやうな、女の聲が密々聞こえる。

其奴が雛子で。

あゝ、昨夜は孝が來て居た筈。……其も此も同じ人間……と今度は櫻之實を描きはじめた。

が、墨一色で、何うも櫻之實らしく見えぬ。のみならず、恁う虛氣では、たか〳〵お玉杓子にしか成りはせぬ、と順一は自ら嘲つて、

盃洗で、ざぶり洗つて、投出した筆のはづみに、墨が颯と染んで擴がる、ト圖く輪取つて、づぶ〳〵と濡れたのが、ひよいと炭團に見えた。

思はず窓を屹と見て、

「己も炭團屋が相應か。」とヤケに呟いた。

が、餘りよく炭團に似たので、屋根のと見較べながら、今度は態と描き出して、暫く間に數が殖える。殖えるに從つて益す能く似る。後で思ふと、外は暗夜で、屋根の炭團の見えやう筈はなかつたのに、……やがて、其が、一つころ〳〵と轉がつて、瓦の勾配を辷る勢ひに、窓からひよいと飛込んで、卷紙の上の炭團へ乘る、と繪を殘してフト消える。又一つ、最う一つ、飛込んでは消え、消えては繪に成る。

順一は立つて、袖を拂つて、羽織を着て、紐を結んでキチンと坐

つた。

で、其の炭團へ、些と試みたい事があつたが、朱の硯などは固よりないので、小刀で指の尖を颯と切つた。最う其の時は半夢中で。

沙時か、脈に響いて、血が迸るばかりなのを、口へ屹と噛んで、筆を含んで、衝と走らす、と鮮かに炭團を染めて、吹けば動きさうに火が彩られた。

順一は茫然として視めて居た。

「うまいわね。」

とお篠が肩越にすらりと立つて、前刻から默つて差覗いて居たと言ふ姿であつた。出の紋着で居た。頬がこけて少し窶れたやうだつたが、蒼白いと言ふほどではなく、莞爾して、振向く順一を、其なり、肩を抱いて向直らせて脊へ凭れながら、沈んだやうに腰を落して、袖の上から手を出しつゝ、卷紙を指で密と壓へて見た。

「何時？」

「今來たばかりなの……漸との思ひで、……辛かつたわ、辛かつたわ。察して下さいな。」

と世を忘れたか、目を合はせた。

「眞個に……伊達先生の、あの蚊いぶしの火に肖然ねえ。精出してお勉强なさいよ……。最う何の事も思はない。」

と其のまゝ緊乎と手を取つた。

「あゝ、明いわね、……餘りまばゆい。」

とすつと立つたが、帶ばかりか、と胸が薄い。帶留の金具がカチリと音した。づるりと背負上げの、麻の葉紋りの水色なのを引出して、上へ、電燈の周圍へ、一つ掛けて、下から卷いて、綾にかけたが、ぶら下る端をト壓へた時、月影に立つたやうに、お篠の姿は蒼く成つた。

「然うかい。」

と下階で於登利の聲がしたのは、客を澤が通じたらしい。……今、出先から勢ひよく歸つて來た處で、些と醉つた足取で、すぐに二階へ、

「稻木さん。」と一つ中途で呼んで、上つて來て、突然襖に手を掛けながら、

「お氣の毒さま！小篠さんは何うしても貰へませんよ……一寸、」

と言つてすらりと開けて、一目見ると、じり〳〵と後へ退つて、

「あ！お嬢……」と言ふが早いか、足を外して、どた〳〵

と階子壇を辷落ちる。

「何うした。」

と順一が、ばた〳〵と下懸けると、門口を矢の如く、若いものが飛込んだ。

「大變だ、大變だ、女房さん、小篠姉さんが咽喉を突いた。」
「うむ、」と唸ると、流れたやうな大の字なりを漸と起掛けた於登利が、其のまゝ仰狀に引くり返る。……順一は思はず、階子段へ腰を懸けて、其の饅のやうな狀を熟と見た。

其の日の小篠は、いぢらしかつた。凡そ、午前から、大勢が、何とか云ふ待合で、寄つて集つて、金子を道具に責て責め拔いた上を、半ば酒で裝潰すと、最う正體がなくなりながら、まだ其でも、一寸遣つて、一目逢はして、……と言つた。
「繪なんざ、己が描いて遣る。」
と五坂が墨を筆へ浴せて、小篠の三味線の、雪のやうな白綾子の胴掛へ、打覆けるやうに塗りつけて、
「そりや熊の形だ。嬉しいか、頂いて、それ彈け！彈け！」

と踏反返る……
ト其でも、はい、と取上げた。胴掛の墨が浸んで、小腕を染めたは尙しも。びしよ濡れにされたので、一式これが身の晴に……四乳を選んだ皮が弛んで、ぼこ〳〵と音が留まつた。其時の小篠の顏。
「さあ、もう三味線では勤まりませんよ。」と於利登が口を切るを機會に、殆ど手を取り足取るばかり。
其からも摺拔けて、何處へ行つても縮りを着けた、臺處へ出て、お三に向つて、小兒の樣に兩手を合はせて賴んだが、
「何ですねえ、野暮らしい、一寸おかみさん——」
と直ぐに喚いた。
仕度へ倒すと、酒と涙で、足も着かず、浮いたやうに成つて居るのを見て、——大悅喜で歸つて來た由……どつと一度煩つた時於登利が懺悔したのである。而して餘り思ひ懸けない。辛く當つたの

も何も彼も、皆あの人のためを思つたのだ、と眞個に眞面目に言ふ。敢て憎むべきではなからう。罹者の身のためを思つたら、或は然うするのが道かも知れない。おとりは痩せて姿好く、跡弔を怠らぬ。

小篠が自殺したのは、懐中の、爪こすり、小刀など七道具の小さな萬能鋏の、尖の鋭いのであつた。

「姉さん、私が聞いても泣きたくなるのは、直翌日の事で、まだ逢ふ間がなかつたんだね、いつの間に書いたんだか、懐中かゞみの中へ、五十錢銀貨を鼻紙に包んで、――年ちやん、櫻之實を買つてお食んなさい――」

姉は聞いて身を絞つて、泣いたが、急に熱が加して震へるので、私は慌しく氷を取りに臺處へ下りた。

ト前刻から二度ばかり詰替へに下りる毎に、丁ど指にかゝる可加減に、細く氷がおろしてある。其の都度、女中が氣を着けるのだ、とばかり思つたが、フト冷たさにつけて心着くと、其の細いのが溶けもせぬのに、女中の蚊帳は扇で搖れる。

冷りとしたが、默つて氷囊を掴んで戻つて、姉の額に翳さうとした時であつた。

「孝さん、お疲れでせう。些とおかはり申しませう。」

と現のやうに聞えたは小篠の聲で、客に來たらしい明石の衣、縞目涼く蚊帳を通して、女扇を、一寸疊んで、帶にさす……

「あゝ、お篠さん。」

と驚きもしないで、姉のお稲は、衝と起き直つて、手を取つた。

……雨の晴れた朝朗に、桔梗の露は星のやう。

姉は其から清々しい。

白鷺 終

明治四十三年二月十五日印刷
明治四十三年二月十八日發行

白鷺（實價金壹圓）

著作者　泉鏡太郎　東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田靜子　東京市京橋區南小田原町二丁目九番地
印刷者　中野鉄太郎　東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷所　東洋印刷株式會社

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂　電話本局五一一番　振替口座東京一六一七

鏡花小史著

風流線
續風流線

口絵●装釘

鏑木清方　鰭崎英朋

月は山の端を出でたり、其の光哲人を寫して靈に、佳人を照らして神に、夜叉を射て宇宙に馳す、雲は芙蓉の如く露は珠玉の如く湖は鏡の如く玲瓏として一千里、見よ文界の秘境、さに諸君の面前にあらはれつゝあり。

實價 郵稅 各金 各金 六錢 拾八錢

婦系圖

口絵●装釘

鰭崎英朋●鏑木清方

次目

鯛、比良魚、見知越、矢車草、新學士、緣談、一家一門、道學先生、男金女土、電車、柏家、誰が引く袖、紫、巣立の鷹、貴婦人、草深邊、二人連、貸小袖、うつら〳〵、思ひやり、お取膳、小待合、道子、私語、宵闇、廊下つたひ、螢、おとづれ、日蝕、隼、

湯島詣

口絵●装釘

梶田半古

次目

紅茶會、三兩二分、通ふ神、紀の國屋、段階子、手鞠の友、湯歸り、描ける幻、朝參詣、言語同斷、下かた、狂犬源兵衛、半札の圓輔、犬張子、胸騷ぎ、鶯、白木の箱、灰神樂、星、

●實價前後各金八拾錢郵稅各八錢

實價 郵稅 金參拾錢 金五拾六錢

春陽堂版

鏡花小史著

草迷宮

口絵●装釘

岡田三郎助

草迷宮は深祕也。幽玄也。典麗也。平易にして然も清新なる妖異譚。

實價 郵稅 金七拾八錢 金拾八錢

愛火

口絵●装釘

川村清雄●鰭崎英朋

著者多年思ひ潛め、祕して語らず、興來り、機の熟するを待ちたるもの、此の編一たび出でゝ、文壇の惰眠を覺し、讀者の睡魔を驚ろむ也、卽是生粹の國詩純正なる日本劇。如何に吾人の言語が韮脆に、靈妙に、幽玄に、優婉に、はた自然の音律に合ふて立處に文たり歌たり得るかを見よ。

實價 郵稅 金七拾五錢 金八拾錢

伊勢の卷

鰭崎英朋畫

實價拾八錢●郵稅貳錢

昔男と聞く時は、今も床しき道中姿、其の物語に題は通へと、これは東の錢なしが、一年思ひたつよしにて參宮の志し、霞と共に立出でゝ、いそぢあまりを三河國、其のから衣、さゝかりの、安辨當の舊の名に、紫はありながら、杜若には似もつかぬ、三等の赤切符、さればお紺の婀娜も見ず、彌次耶兵衛が酒落もなき、初詣での思出草、宿屋の硯を假寢の床に、路の記の端に書き入れて、御見に入れしは之れなる一卷。

鏡花小史著

鏡花集

袖珍

橋口五葉意匠

●第一卷出版

寶價壹圓廿錢
郵稅金八錢

目次

豫備兵、義血狹血、三尺角、三尺角
拾遺、辰巳卷談、凱旋祭、ねむり看
守、湖のほとり、水雞の里、葛飾砂
子、袖屏風、うしろ髮、湯女の魂、
二世の契、繪日傘、伊勢の卷、

柳筥

柳原蕉園畫

目次

幻往來、X蟷螂鯰鐵道、妖僧記、
旅僧、女客、妖怪年代記、木精、
毬栗、置炬燵、お留守さま、立春、
裸燈燭、化鳥、千歲の鉢、三人客、
紫陽花、女肩衣、長屋又傷、青切
符、妙の宮、五本松、山の手小景、

寶價 金六拾五錢
郵稅 金五錢

田每鏡

錦木清方意匠

むつとして歸れば門の青柳のと、端唄にうたふ月の影、雲吹拂ふ力はなくとも、朧の風情、冴けきも、凄きも、涼しきも或はあらむ、此の小かがみを君が袂に。胸の平ならざるとき、口惜き時悲しき時、樂しき折にも取り出で、心々に見給へとよ。

寶價 金五拾六錢
郵稅 金五錢

春陽堂版

鏡花小史著

照葉狂言

鈴木華邨畫

目次

鞠唄、仙冠者、野衾、狂言、夜の辻、假小屋、井筒、重井筒、峯の堂、

●附錄

五の君

寶價 金參拾六錢
郵稅 金五錢

通夜物語

故富岡永洗畫

いかに方々、來つて此の篇に就いて人生の意氣の粹なるを見ずや、出及庖丁は女の魂、血を以て描くは男の腕なり、一は傾城一は畫工。

寶價 金廿五錢
郵稅 金六錢

錦帶記

鈴木華邨畫

あの位な名高い、惡蔦、毒婦、鬼、畜生、夜叉、それは知つてるが、自分をなつかしそうに見えるのは、慈悲深い差配に店賃を免ぜられたよりも嬉しい、乳母に抱かれたよりも安心だ、姉にいつくしまれるよりも心強い、いい心持だ、愉快だ、爽快だ、毒蛇は人を殺すものだ、けれども、我に馴れ、我に親み、我に寄へれば猫よりも賴母しい、強盜は恐るべしだけれども……

●目下賣切●

春陽堂版

鏡花小史著

黑百合

口絵四葉釘裝

鏑木清方　山中古洞

越中の國立山なる、石段の奥深く、黑百合となんいふものありと、語るもおどろ〳〵しや。姫百合白百合こそなつかしけれ、鬼と呼ぶさへ、分けて此の凄じきを、雄々しきは打笑ひ、然らぬは袖凡帳しまふらむ。富山の町の花賣は、山賤の類ひにあらずあはれに美しき女也。其の名の雪の白きに愛でゝ、百合の名の黑きをも濃き紫と見たまへかし。

目下賣切

三枚續

口絵四葉釘裝

鏑木清方

遠山の櫻にあらず、野路の梅にあらず、豪家が祕藏の娘ながら、簪の花の枝は撓めざる、千代田の巢に生え抜きの氣象もの、柳屋のお夏が傳。

目下賣切

沈鐘

登張竹風　泉鏡花　共譯

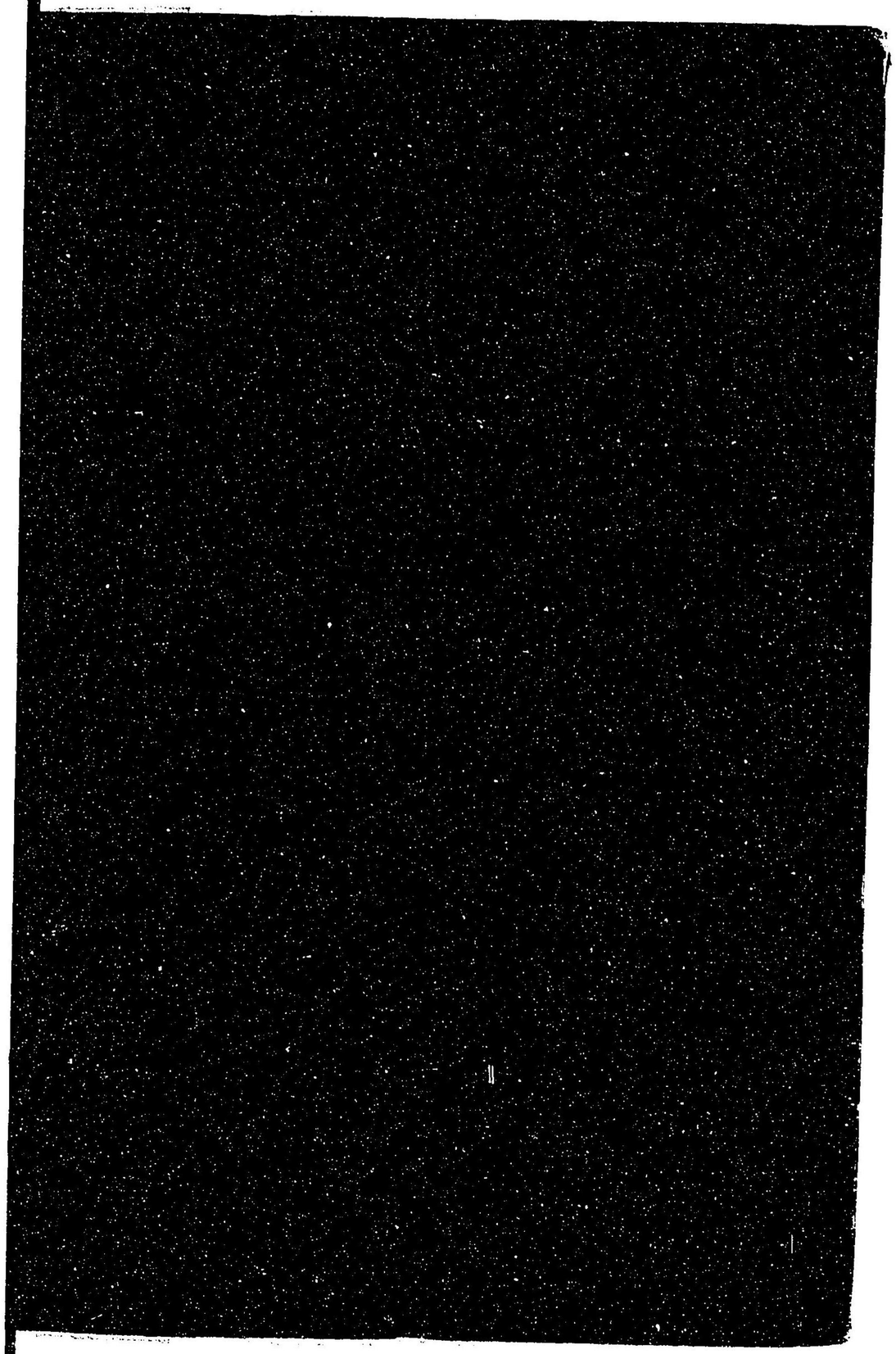
譯者三年の經營により沈鐘は浮べり、白銀ケ嶽の下に。

大冊五百餘頁、盛裝新釘、繪畫數面、實價金壹圓貳拾錢、郵稅金八錢

春陽堂版

孝さんと
ひぶちやん
人道青蔵

~~325~~ F13
~~56~~ I·99
7



205196-000-9

F13-I99-7ウ

白鷺

泉　鏡花／著

M43

EDV-0223

25 II 30